PROGRESS REPORT ON
GENERIC SKILLS

PROGセミナー2014

2年間の蓄積から見えてきたもの

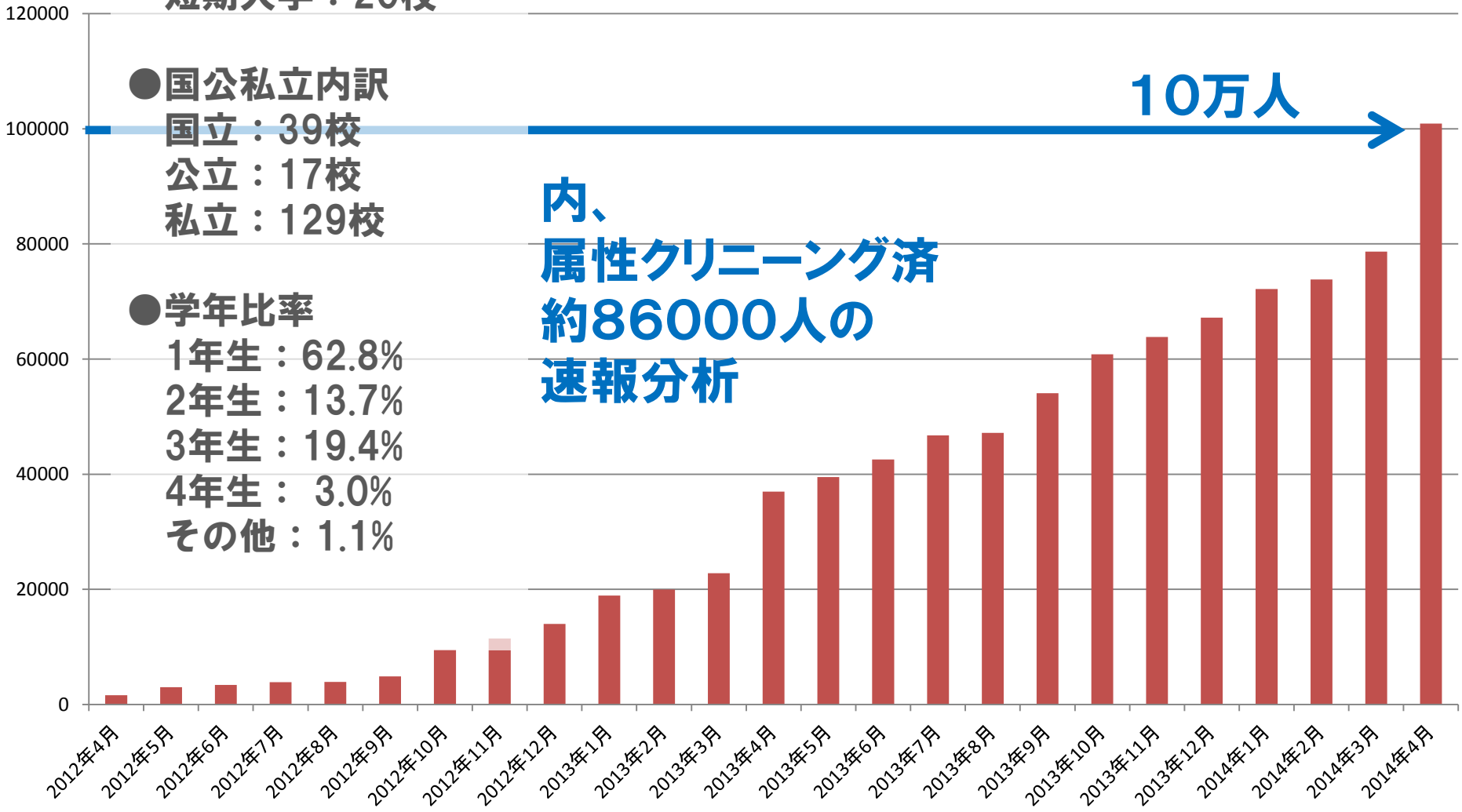
主催　学校法人河合塾　株式会社リアセック　株式会社KEIアドバンス

受験者10万人の内訳

●学校区分
四年制大学：165校
短期大学：20校

●国公私立内訳
国立：39校
公立：17校
私立：129校

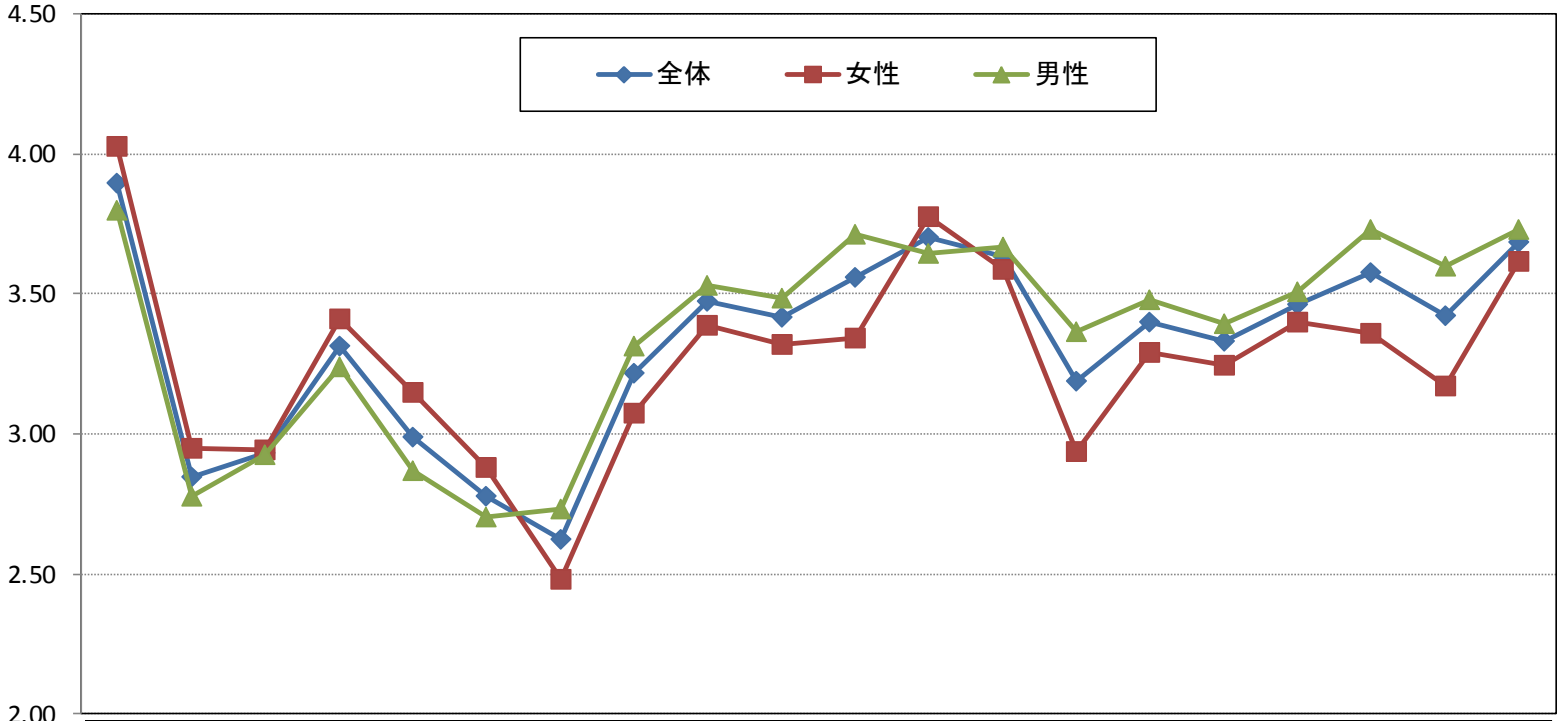
●学年比率
1年生：62.8%
2年生：13.7%
3年生：19.4%
4年生： 3.0%
その他：1.1%



男女別の傾向

女性が高いのは、リテラシーの情報収集力、課題発見力、構想力、言語処理力と、コンピテンシーの親和力の各要素。
男性が高いのは、リテラシーの非言語処理力と、親和力、協働力を除くコンピテンシーの各要素。

■基礎力【性別】



リテラシー							コンピテンシー												
総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力

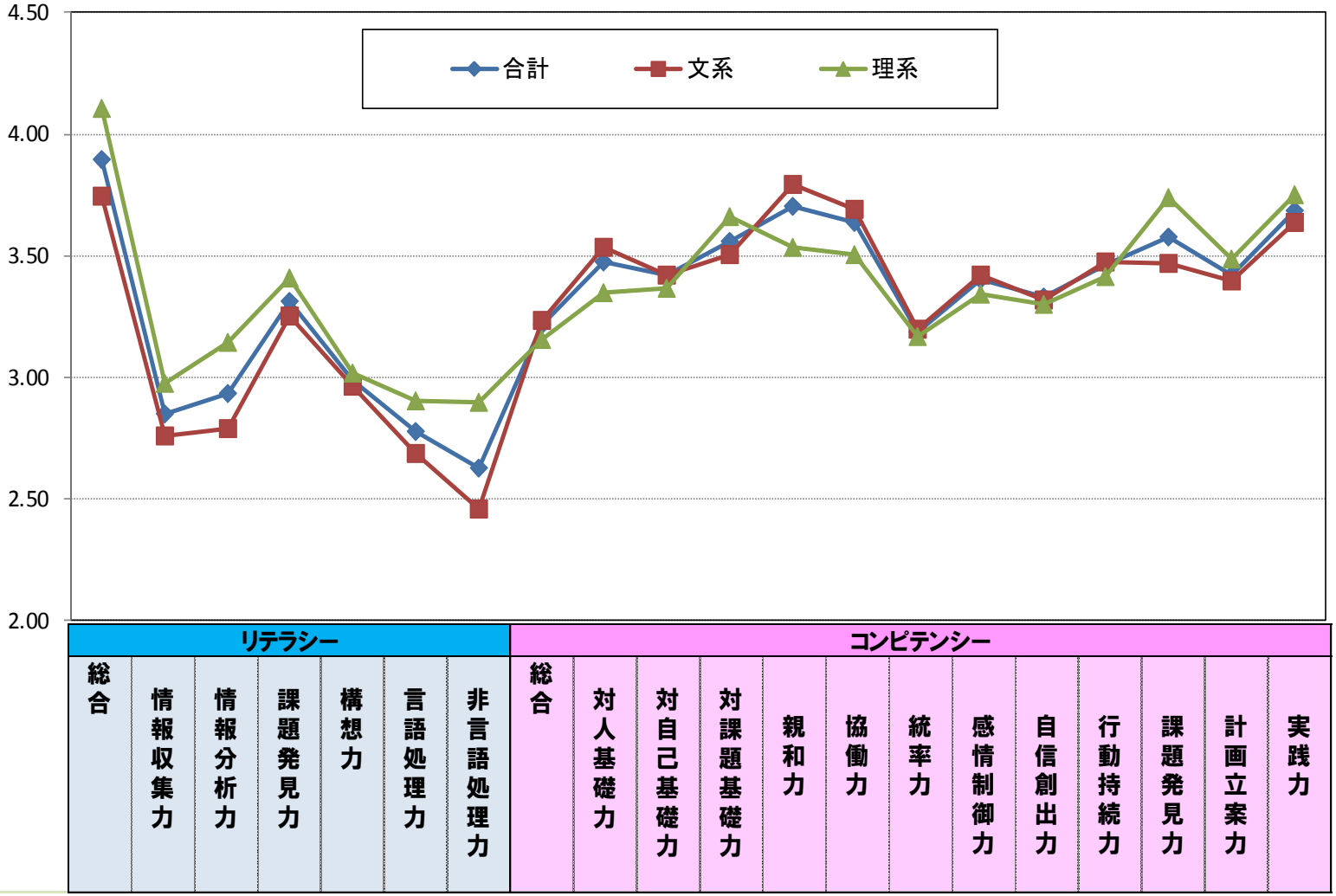
※能力の判定は
　レベル1～7
※リテラシーの小分類
　情報収集、情報分析
　課題発見、構想、
　言語処理力、非言語
　処理力のみ
　レベル1～5

※属性クリーニング済の約86000名の速報分析

文理分別の傾向

文系が高いのは、コンピテンシーの親和力、協働力の各要素。
理系が高いのは、構想力を除くリテラシーの各要素と、課題発見力を中心とするコンピテンシーの対課題領域。

■基礎力【文理別】



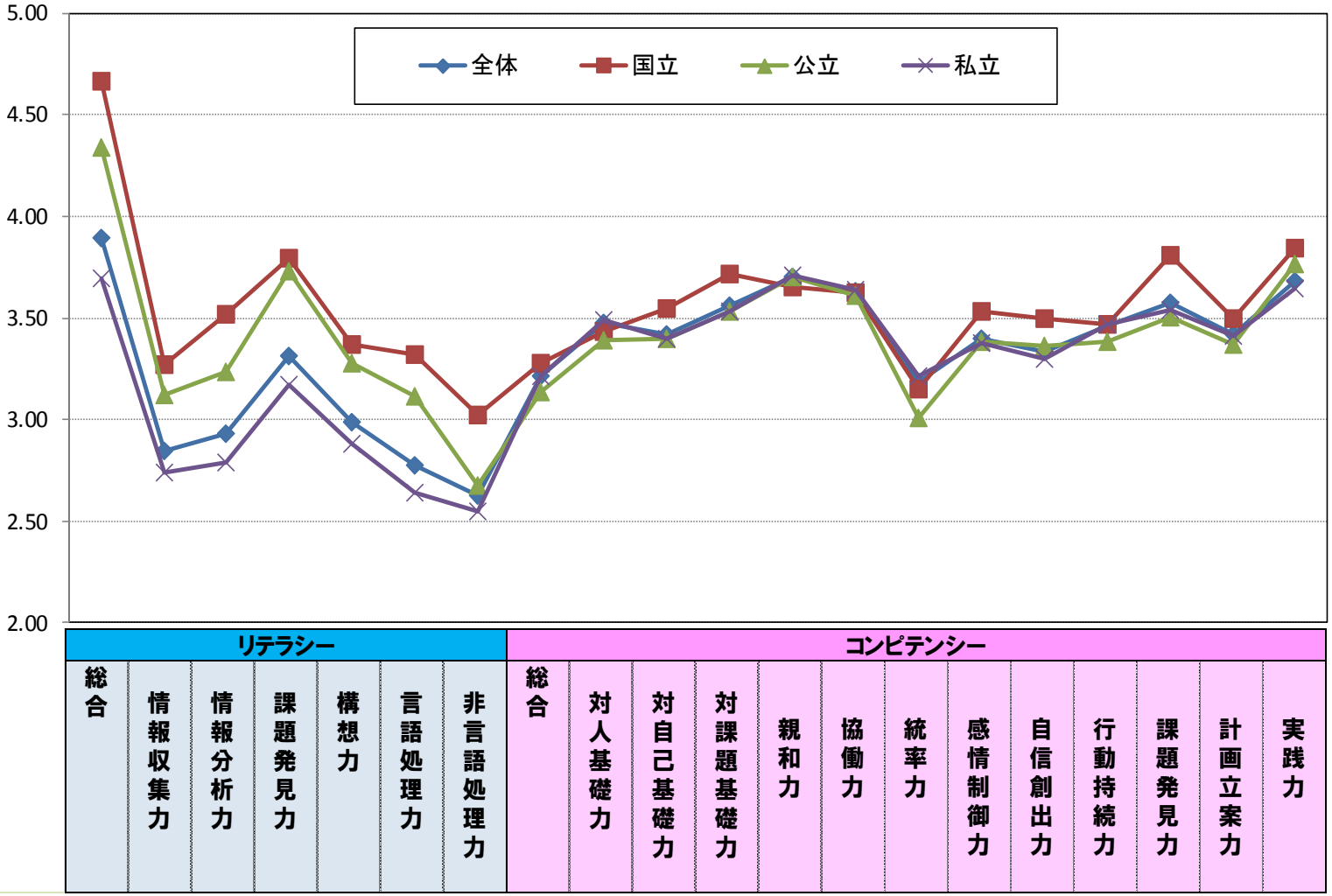
※能力の判定は
レベル1～7
※リテラシーの小分類
情報収集、情報分析
課題発見、構想、
言語処理力、非言語
処理力のみ
レベル1～5

※属性クリーニング済の約86000名の速報分析

学校区分別の傾向

国立は、コンピテンシーの親和力、協働力を除いて、リテラシー、コンピテンシーの各要素が押しなべて高い。
公立は、リテラシーは高いが、統率力をはじめとして、コンピテンシーが全般的に低い。
私立は、リテラシーは全般に低いが、コンピテンシーの対人領域の各要素は国立とほぼ同程度。

■基礎力【学校区分別】



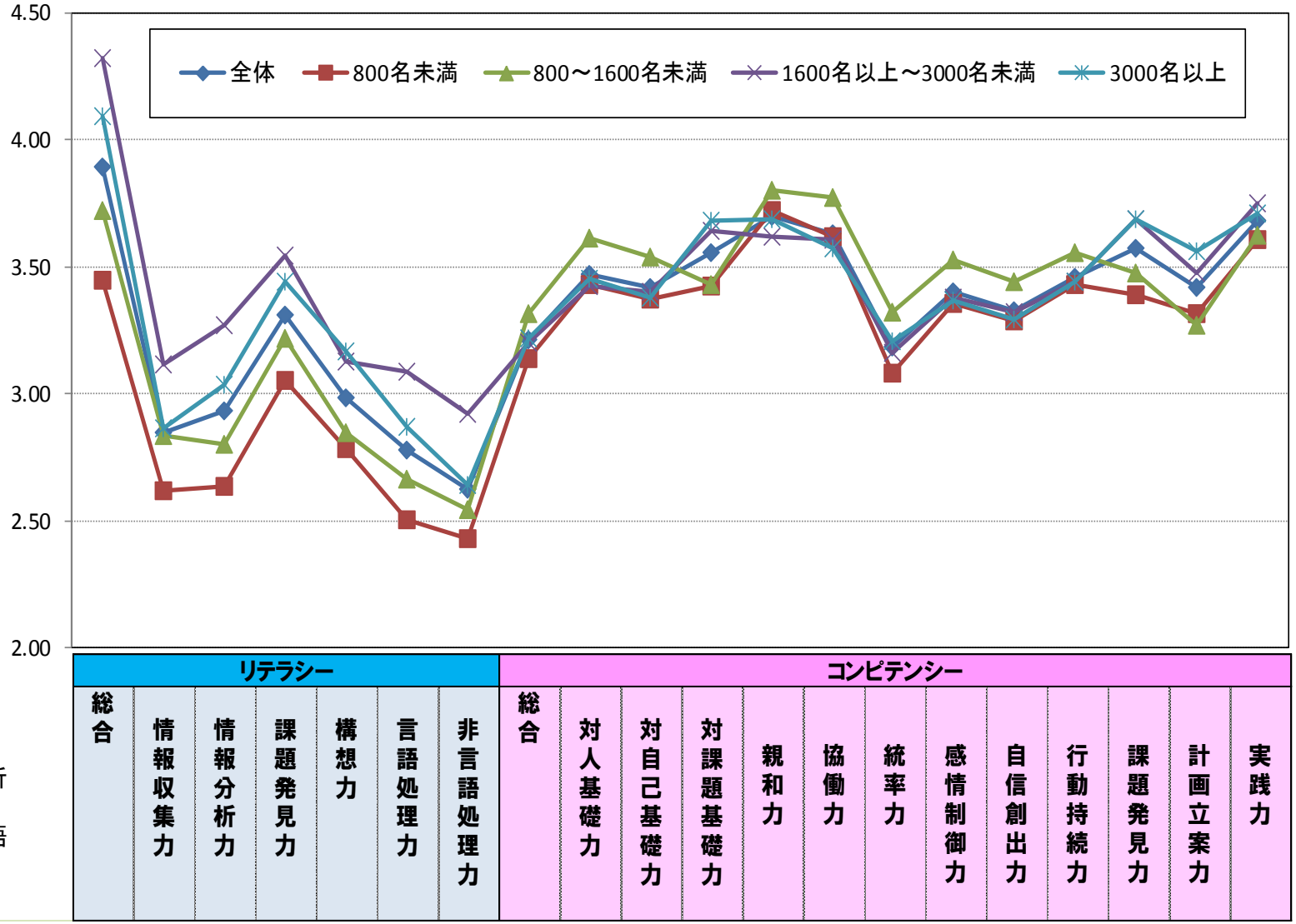
※能力の判定は
　レベル1～7
※リテラシーの小分類
　情報収集、情報分析
　課題発見、構想、
　言語処理力、非言語
　処理力のみ
　レベル1～5

※属性クリーニング済の約86000名の速報分析

学校規模別の傾向

リテラシーが最も高いのは1600名～3000名の群、コンピテンシーの対人・対自己領域が高いのは800名～1600名の群。
コンピテンシーの対課題領域が高いのは3000名以上の群。

■基礎力【規模別】



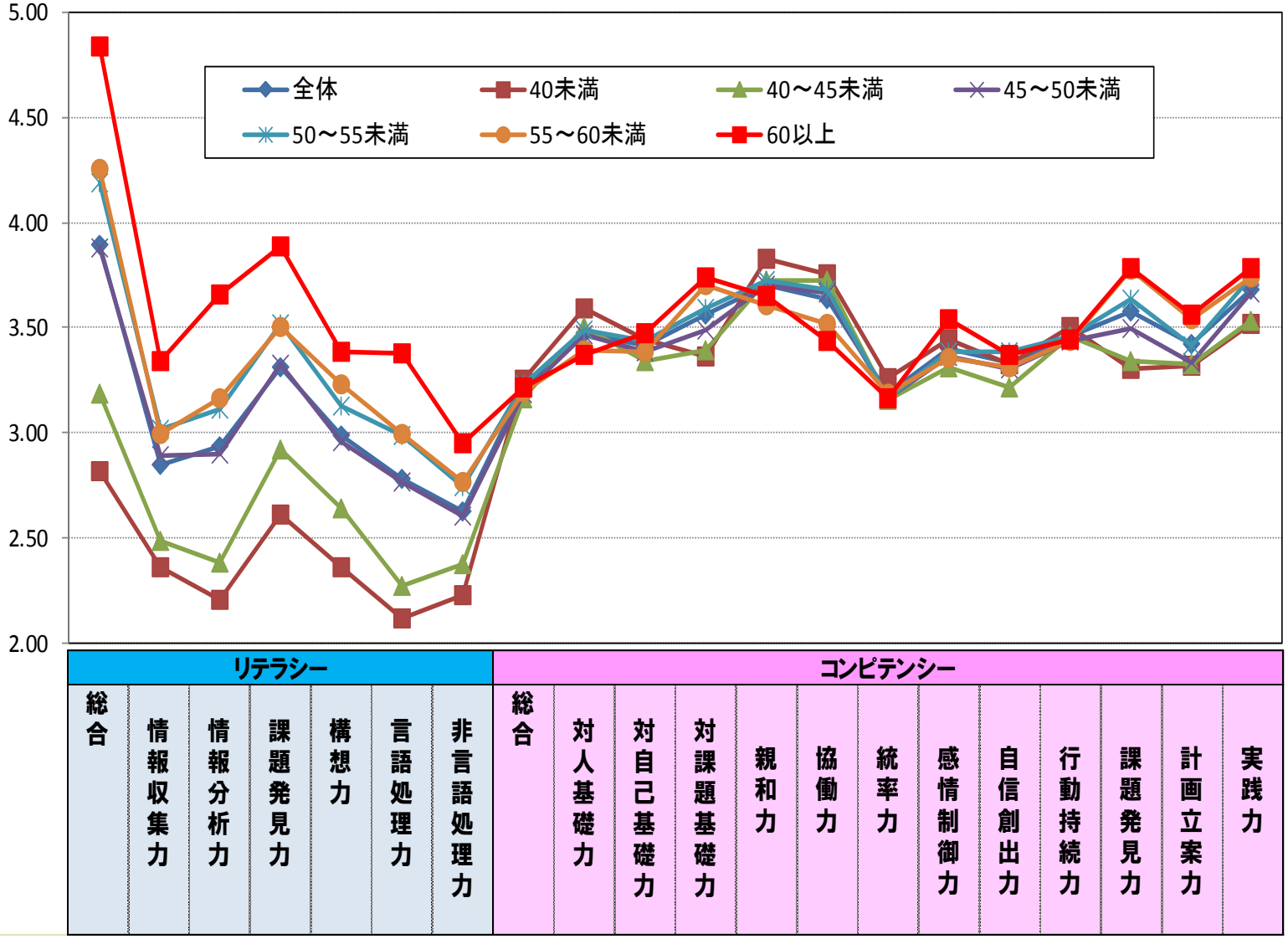
※能力の判定は
　レベル1～7
※リテラシーの小分類
　情報収集、情報分析
　課題発見、構想、
　言語処理力、非言語
　処理力のみ
　レベル1～5

※属性クリーニング済の約86000名の速報分析

入学偏差値別の傾向

リテラシーの高さは、ほぼ入学偏差値の高さと順序づく。リテラシーほどではないが、コンピテンシーの対課題領域にも同様の傾向が見られる。一方で、コンピテンシーの対人領域は入学難易度の低い群が高い群を上回る。

■基礎力【偏差値別】



※能力の判定は
　レベル1～7
※リテラシーの小分類
　情報収集、情報分析
　課題発見、構想、
　言語処理力、非言語
　処理力のみ
　レベル1～5

※属性クリーニング済の約86000名の速報分析

クラスター分析による学生のタイプ分類

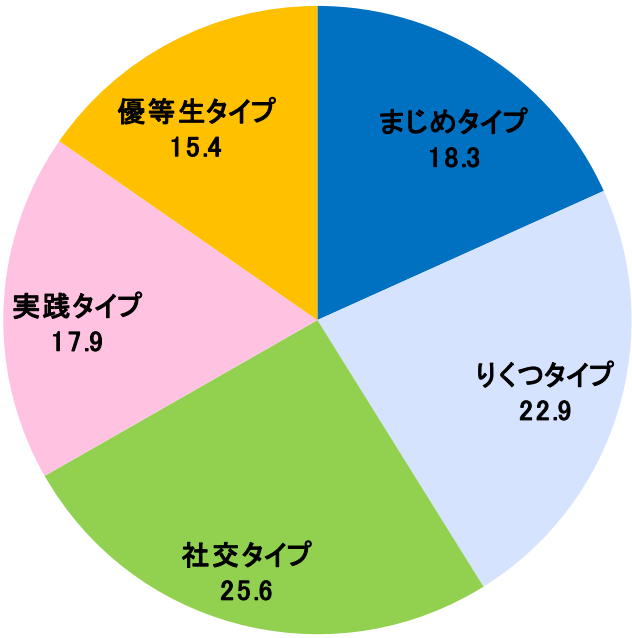
リテラシー総合と、コンピテンシー中分類（9要素）のスコアを基に、学生のタイプを以下の5つに分類。
①対人・対自己領域の基礎力は低いが、計画を立ててPDCAをきちんと回す「まじめタイプ」。 ②論理的な思考は強いが、コンピテンシーが低い「りくつタイプ」。 ③親和力・協働力が高く、対課題領域のコンピテンシーは低い「社交タイプ」。
④コンピテンシーが軒並み高い「実践タイプ」。 ⑤リテラシーが極めて高く、感情制御力や対課題領域のコンピテンシーが高い「優等生タイプ」。

■クラスター重心

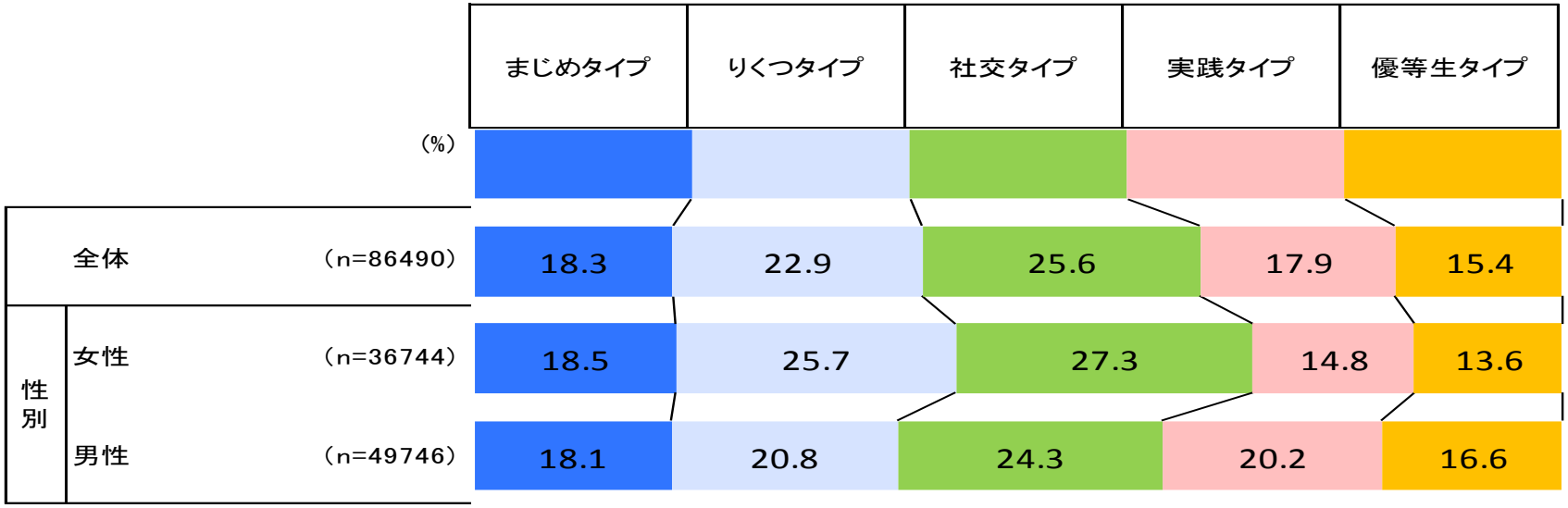
	クラスター				
	まじめタイプ	りくつタイプ	社交タイプ	実践タイプ	優等生タイプ
リテラシー総合	3.8	4.1	3.3	3.7	5.2
親和力	2.9	2.2	4.7	5.7	3.0
協働力	2.5	2.1	4.7	5.6	3.2
統率力	2.0	1.8	3.8	5.0	3.5
感情制御力	2.3	2.2	3.8	4.9	4.1
自信創出力	2.2	2.1	3.9	5.0	3.8
行動持続力	2.4	2.1	4.2	5.1	3.8
課題発見力	3.8	2.1	2.8	5.2	4.9
計画立案力	4.8	2.0	2.4	4.7	4.2
実践力	4.2	2.7	2.9	5.1	4.3

スコア …4.0以上のセル
スコア …3.0以下のセル

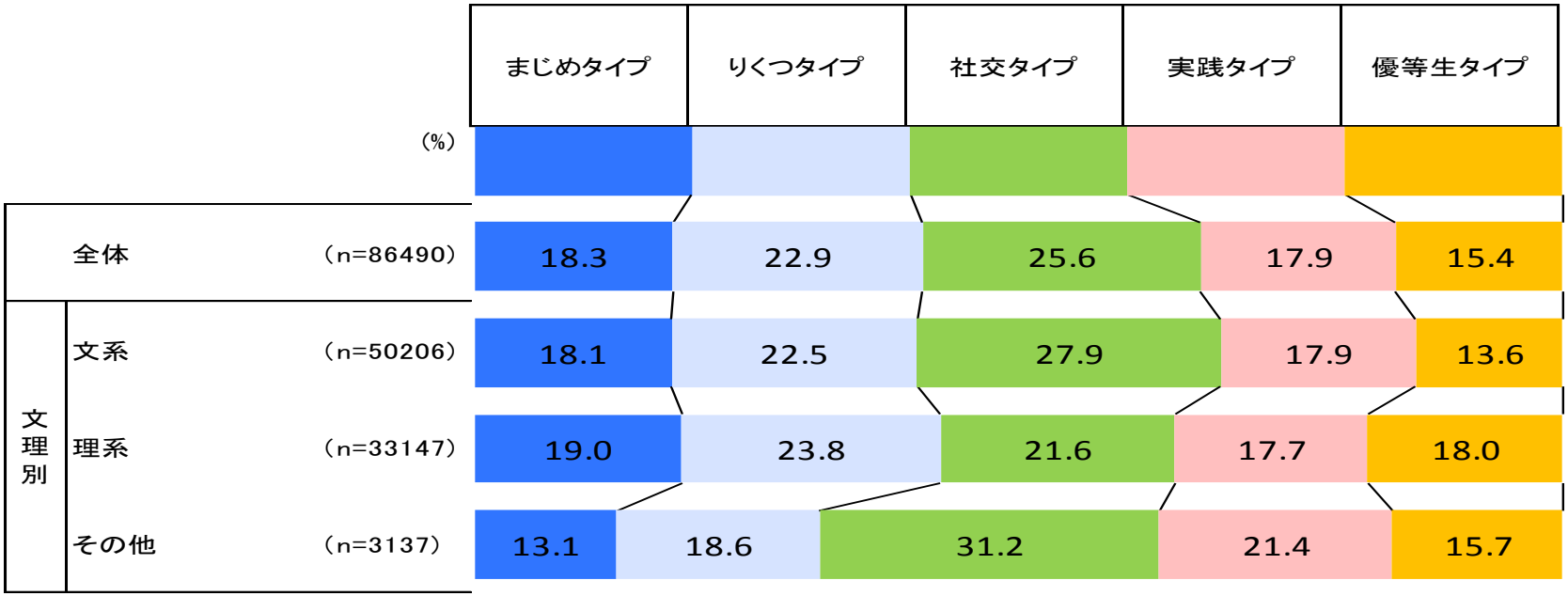
クラスター分布



属性別のタイプ分布（１）



【グラフ】性別×クラスター



【グラフ】文理×クラスター

属性別のタイプ分布（２）

			まじめタイプ	りくつタイプ	社交タイプ	実践タイプ	優等生タイプ
		（%）					
全体		（n=86490）	18.3	22.9	25.6	17.9	15.4
学校区分別	国立	（n=12722）	17.5	22.0	20.7	18.8	21.0
	公立	（n=8184）	19.0	24.3	23.6	17.3	15.8
	私立	（n=65584）	18.3	22.9	26.8	17.8	14.2

【グラフ】設置区分×クラスター

			まじめタイプ	りくつタイプ	社交タイプ	実践タイプ	優等生タイプ
		（%）					
全体		（n=86490）	18.3	22.9	25.6	17.9	15.4
規模別	800名未満	（n=22254）	17.9	25.2	28.3	17.2	11.4
	800～1600名未満	（n=17906）	15.0	22.3	30.0	18.9	13.8
	1600名以上～3000名未満	（n=19704）	18.6	22.9	21.1	18.3	19.1
	3000名以上	（n=26383）	20.4	21.4	23.7	17.6	16.9

【グラフ】規模×クラスター

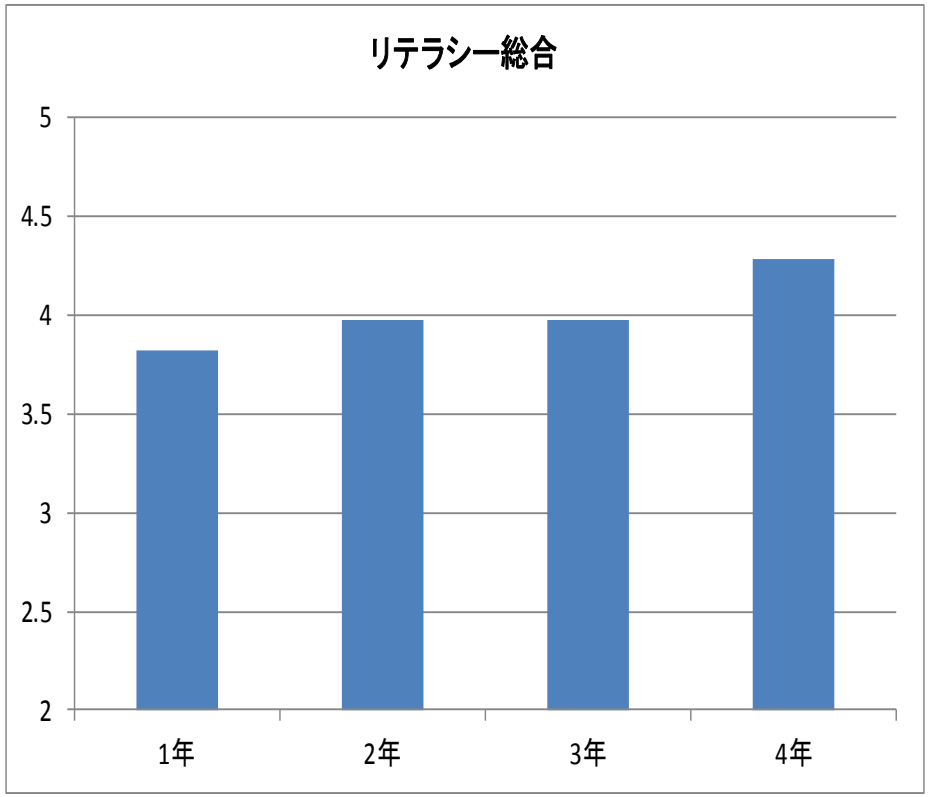
属性別のタイプ分布（３）

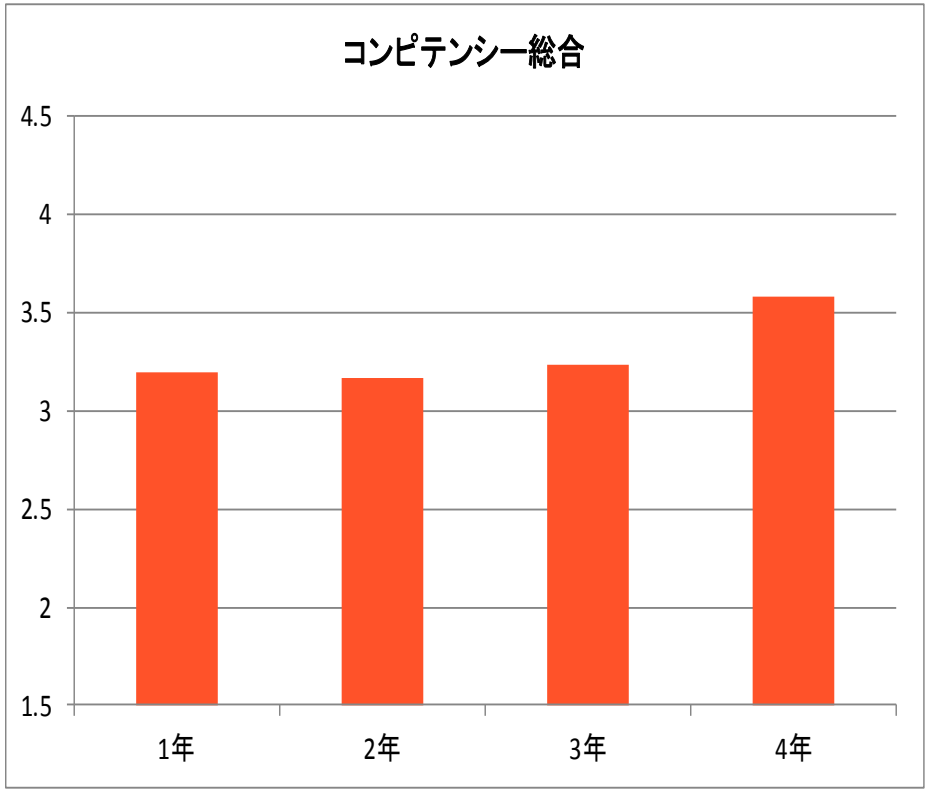
			まじめタイプ	りくつタイプ	社交タイプ	実践タイプ	優等生タイプ
		（%）					
全体		（n=86490）	18.3	22.9	25.6	17.9	15.4
偏差値別	40未満	（n=8317）	16.0	23.3	34.2	18.3	8.3
	40～45未満	（n=4884）	17.5	25.3	31.0	16.4	9.7
	45～50未満	（n=18101）	18.5	23.5	26.3	17.7	14.1
	50～55未満	（n=15122）	18.2	22.8	24.5	17.7	16.8
	55～60未満	（n=21635）	19.9	22.3	22.0	17.6	18.2
	60以上	（n=7630）	18.2	21.3	20.1	16.9	23.5

【グラフ】偏差値×クラスター

学年進行による伸長（１）

リテラシー総合は、１年次から2年次に若干伸長し、２年次３年次ではあまり変化せず、３年次から4年次にかけて、再び伸長する傾向が見られる。
コンピテンシー総合は、１年次から3年次まではあまり変化せず、３年次から4年次にかけて伸長する傾向が見られる。



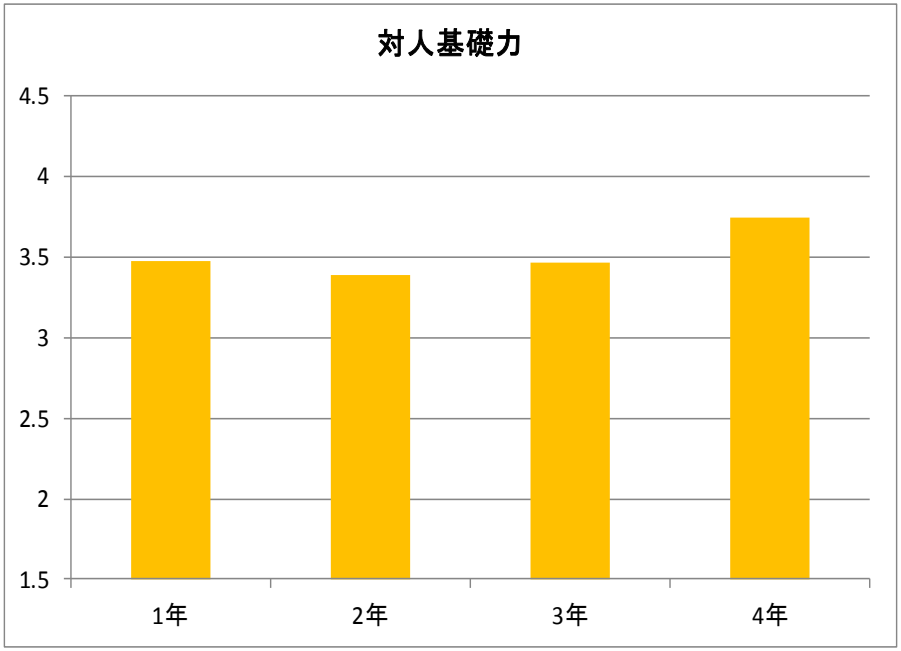


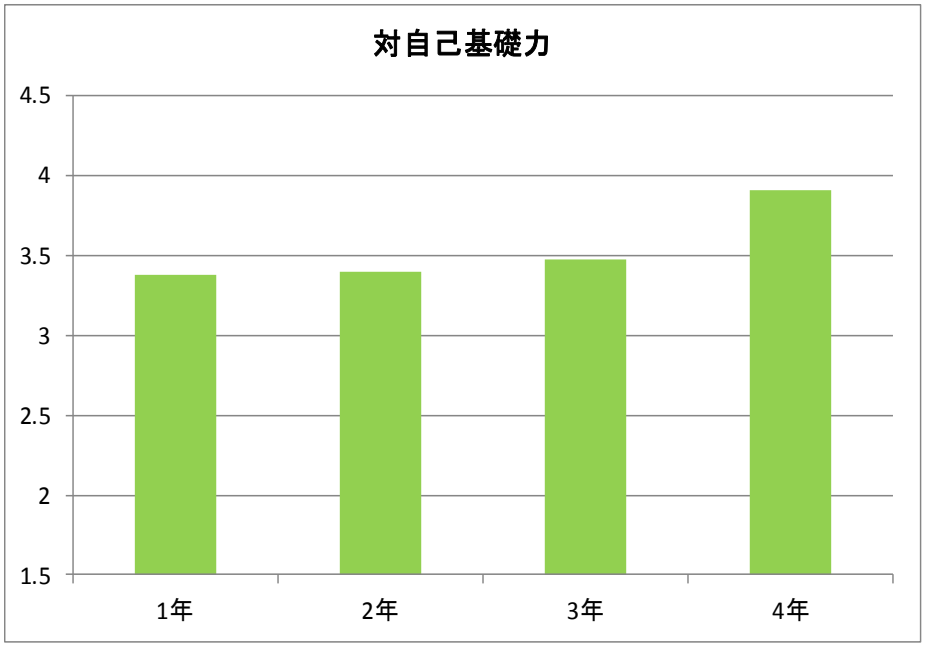
学年進行による伸長（２）

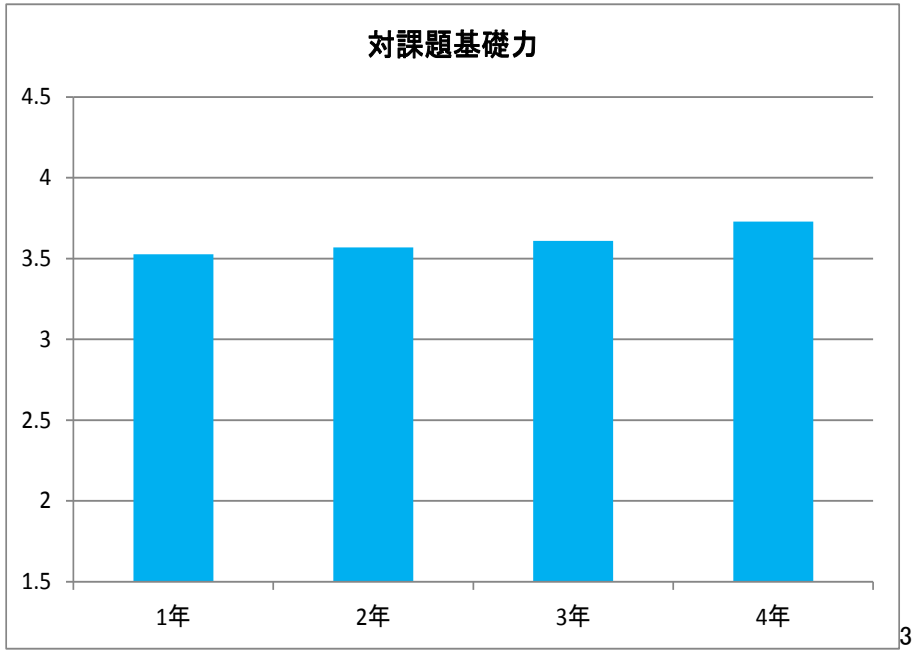
対人領域は、１年次から3年次にかけて停滞し、４年次で伸長する傾向にある。

対自己領域は、１年次から3年次においても、若干の伸長が見られるが、４年次の変化が大きい。

対課題領域は、１年次から4年次にかけて、少しずつ伸長する傾向にある。





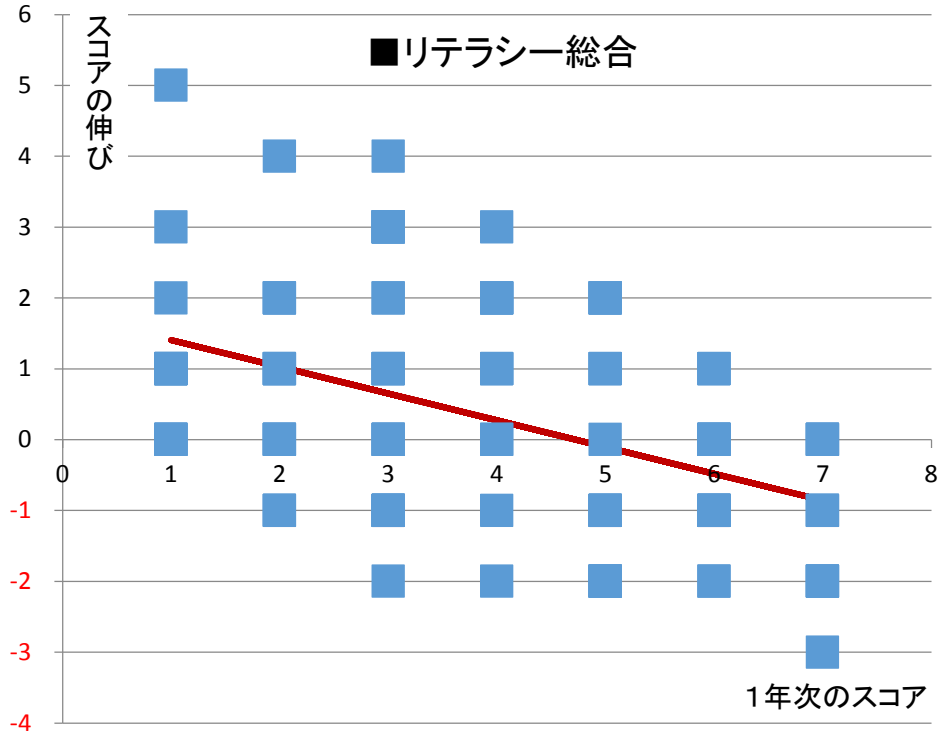


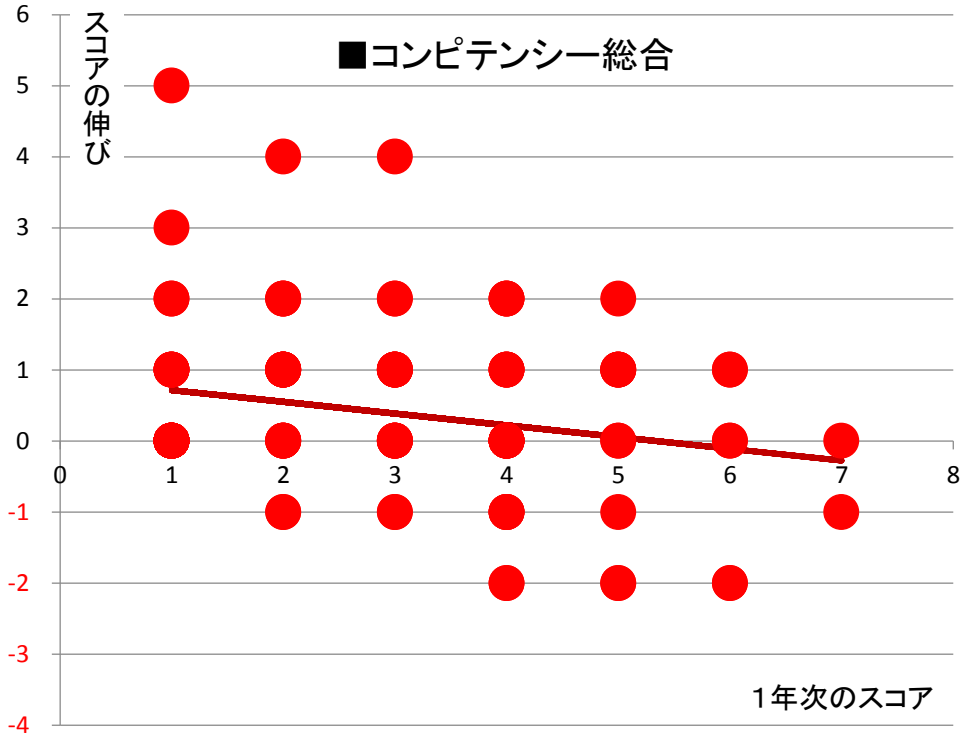
【分析事例】スコアの伸びと初期値の関係

リテラシー、コンピテンシーとも、１年次のスコアが低いほど、１年から2年の伸び幅が大きい。
よって、経年変化の要因分析の際には、この初期値の影響を除去して考える必要がある。
サンプル数が潤沢ならば、同一レベルごとに分析することが考えられるが、サンプル数が限られるときには、
例えば最少二乗法で線形のモデルを想定し、それとの差をもって分析する方法などが考えられる。

限られたサンプルで経年変化を分析した例（N=109）

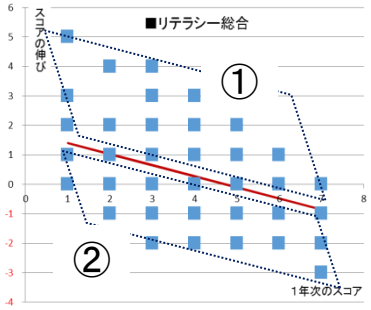
N=109

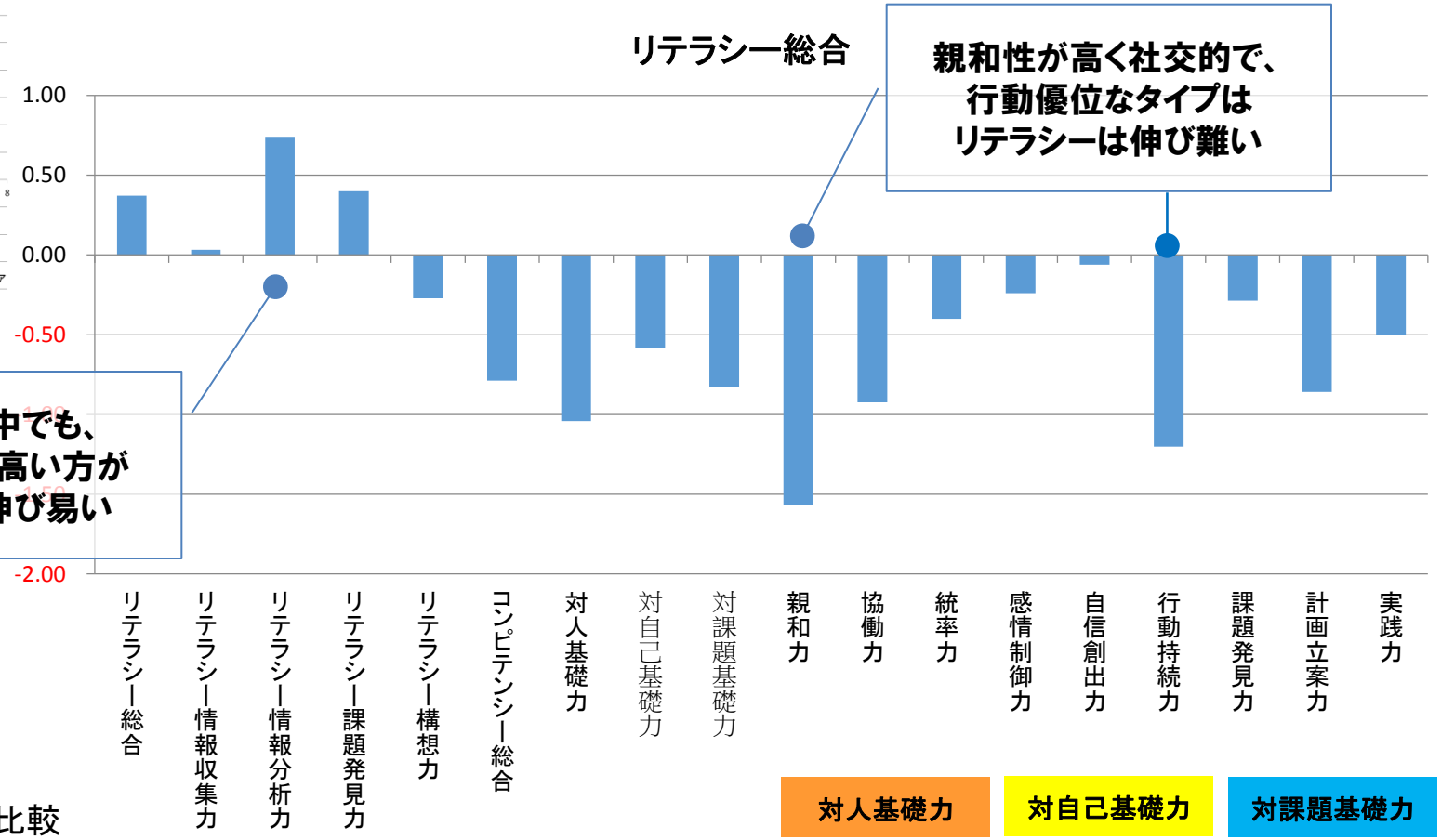




―― は、最少二乗法で求めた「初期値の大きさによって、スコアの伸びを予測する」モデル

【分析事例】リテラシー総合の経年変化要因分析





親和性が高く社交的で、行動優位なタイプはリテラシーは伸び難い

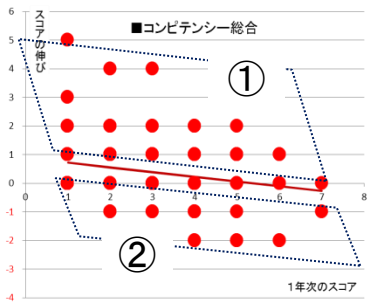
リテラシーの中でも、情報分析力の高い方がリテラシーは伸び易い

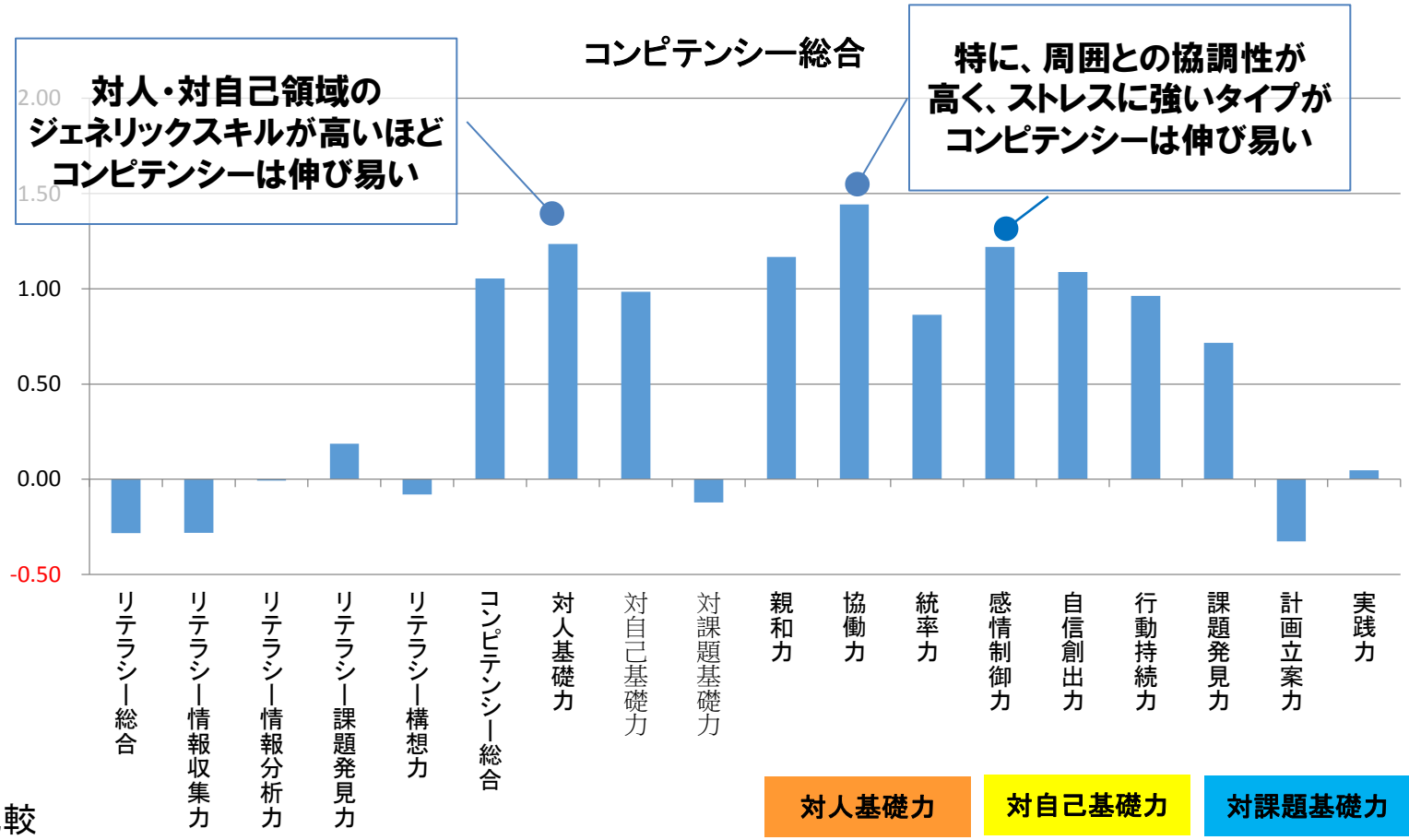
対人基礎力 **対自己基礎力** **対課題基礎力**

■1年次のスコアの比較

①上位30%平均		4.09	2.97	3.30	3.24	2.67	2.18	2.30	2.58	2.45	2.15	2.55	2.79	2.70	2.97	2.42	3.15	2.48	2.97
②下位30%平均		3.72	2.94	2.56	2.84	2.94	2.97	3.34	3.16	3.28	3.72	3.47	3.19	2.94	3.03	3.63	3.44	3.34	3.47
平均差(①−②)		0.37	0.03	0.74	0.40	−0.27	−0.79	−1.04	−0.58	−0.83	−1.57	−0.92	−0.40	−0.24	−0.06	−1.20	−0.29	−0.86	−0.50
平均値差の検定(確率)		0.43	0.94	0.06	0.28	0.55	0.03	0.01	0.15	0.05	0.00	0.03	0.38	0.55	0.89	0.01	0.58	0.05	0.18
10%未満に△				△			△	△		△	△	△				△		△	
5%未満に○							○	○		○	○	○				○			
1%未満に◎											◎					◎			

【分析事例】コンピテンシー総合の経年変化の要因分析





対人基礎力　対自己基礎力　対課題基礎力

■1年次のスコアの比較

①上位30%平均		3.97	3.19	3.19	3.16	2.87	3.35	3.71	3.48	2.90	3.74	3.97	3.61	3.65	3.61	3.61	3.74	2.77	3.32
②下位30%平均		4.25	3.48	3.20	2.98	2.95	2.30	2.48	2.50	3.03	2.58	2.53	2.75	2.43	2.53	2.65	3.03	3.10	3.28
平均差(①−②)		−0.28	−0.28	−0.01	0.19	−0.08	1.05	1.23	0.98	−0.12	1.17	1.44	0.86	1.22	1.09	0.96	0.72	−0.33	0.05
平均値差の検定(確率)		0.54	0.46	0.99	0.59	0.85	0.01	0.01	0.02	0.78	0.01	0.00	0.06	0.00	0.01	0.03	0.14	0.45	0.89
10%未満に△							△	△	△		△	△	△	△	△	△			
5%未満に○							○	○	○		○	○		○	○	○			
1%未満に◎								◎				◎		◎					

【分析事例】個人の活動履歴とコンピテンシーの関係

$$y_{it} = \beta y_{i,t-1} + \alpha \delta_i$$

コンピテンシーの2012年後期スコア　コンピテンシーの2012年前期スコア　各種経験（下記）の有無（1，0）

		係数	有意水準
β	2012前期	0.847	0%
α	アルバイト	0.286	23%
	課外活動	−0.307	25%
	インターンシップ	0.055	85%
	資格受験	0.175	53%
	ＳＰＩ	0.343	21%
	力を伸ばす実践	0.614	9%
	役立った授業	0.172	51%
		n=55	
		R2=0.936	

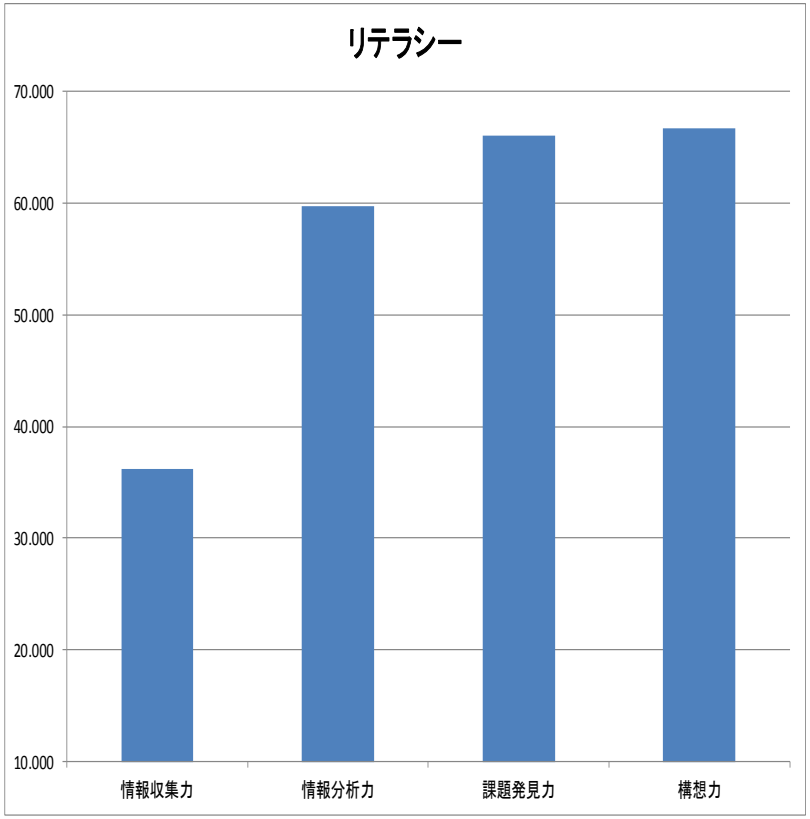
都市デザイン工学科　伊藤先生　他「学生の社会人基礎力評価に向けた取り組みと課題」
工学教育協会2103年度年次大会　発表論文より

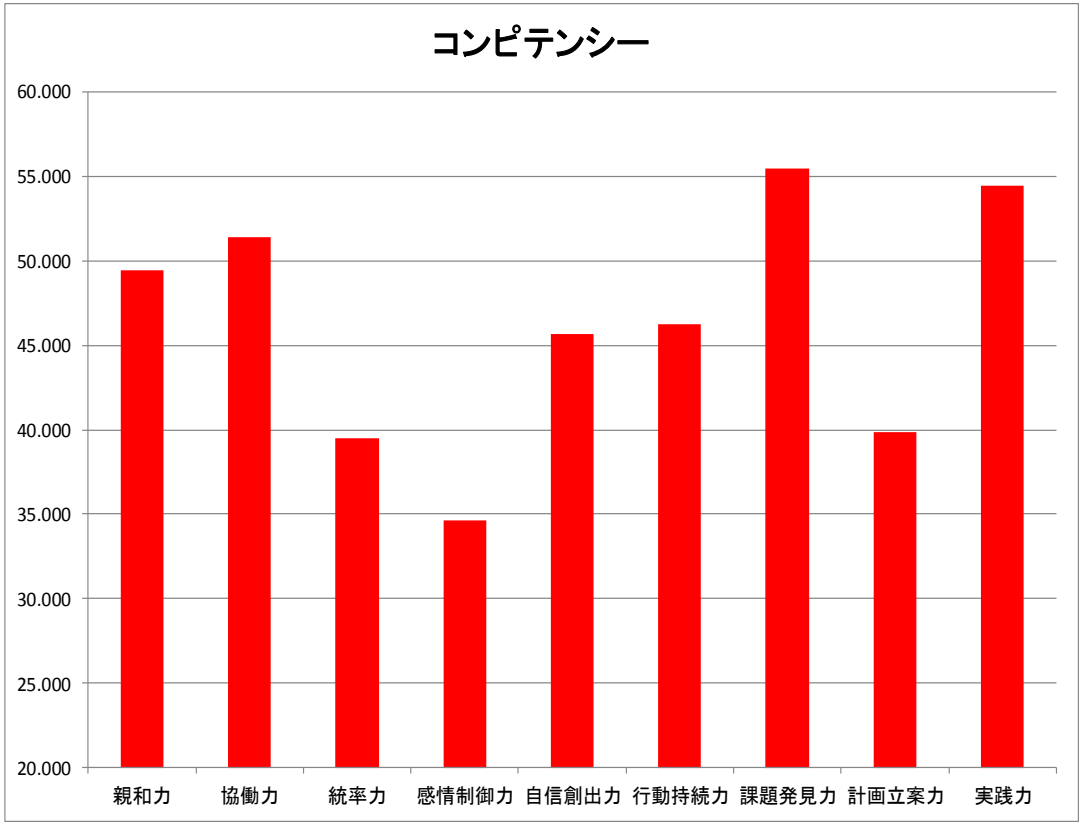
**コンピテンシーを意図して育成するには、授業や学生生活の中に
より実践的な活動を組み込むことが効果的。**

【分析事例】教育活動との関連を探る（１）

教員が実施している授業内容を分析した事例

先生方に、ご自身の授業に関するアンケート（次ページ）を実施し、
学部のカリキュラム内容を、基礎力の側面から可視化した。





※数値はダミーものを表示しています

学生の基礎力の（現状の）強み・弱みと比較することで、
施策の妥当性や、不足部分を探る。

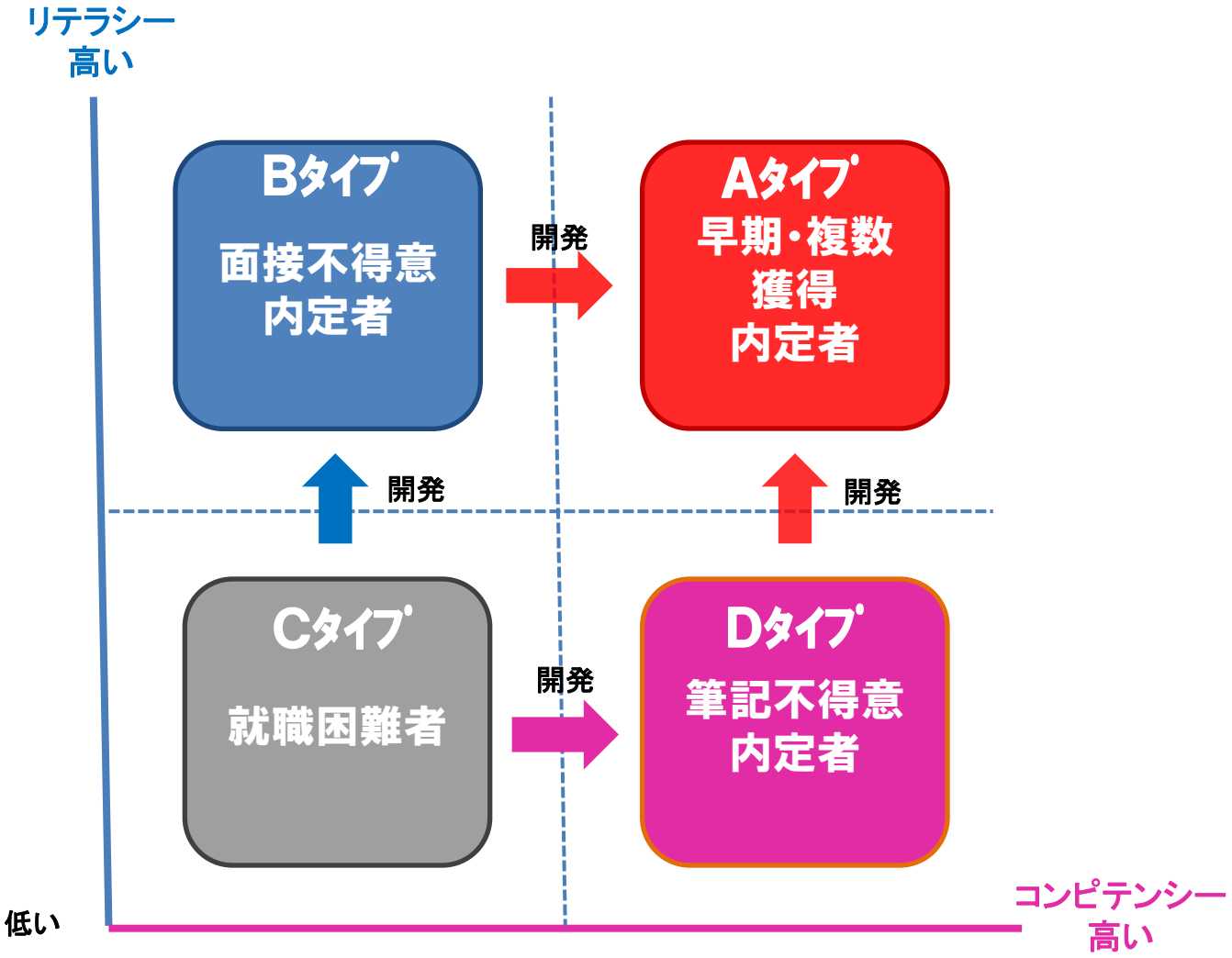
【分析事例】教育活動との関連を探る（２）

基礎力中分類	【教員向けアンケート】 Q：先生の授業では、どのような取り組みを行っていらっしゃいますか？ または、どのような経験ができますか？当該授業の内容がどの程度あてはまるかをお答え下さい。	全く当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる	よく当てはまる
課題発見力	ニュースや時事問題に関心を持たせるようにしている	1	2	3	4
	適切に文献を検索し必要な知識を収集させるようにしている	1	2	3	4
	様々な情報源を適切に活用できるよう指導している	1	2	3	4
	思い込みや常識に捉われず、本質を深く考えるよう指導している	1	2	3	4
	日頃から問題意識を強く持って物事を見るよう指導している	1	2	3	4
	原因を明らかにするために、さまざまな角度から検討・分析するよう指導している	1	2	3	4
	物事の原因を考える際には、複数の仮説を立てて検証するよう指導している	1	2	3	4
	物事の因果関係を、論理的に考える機会が多い	1	2	3	4
	問題の本質に迫るために、自分で納得するまで深く考えさせるようにしている	1	2	3	4
計画立案力	自分で何らかの目標を設定させて、授業に臨ませている	1	2	3	4
	結果を出すために、途中段階の具体的目標を設定させるようにしている	1	2	3	4
	ゴール（目指す姿）をイメージしてから、課題に取り組ませるようにしている	1	2	3	4
	目標を達するまでの行動計画を立てさせている	1	2	3	4
	結果を予測して様々な打ち手を考えるよう指導している	1	2	3	4
	想定される障害を考慮して代替案を考えるよう指導している	1	2	3	4
	計画を立てる際に、その現実性について十分に吟味させている	1	2	3	4
	立てた計画について、達成の見込みや問題点を客観的にあげるよう指導している	1	2	3	4

就職活動結果との分析のフレーム

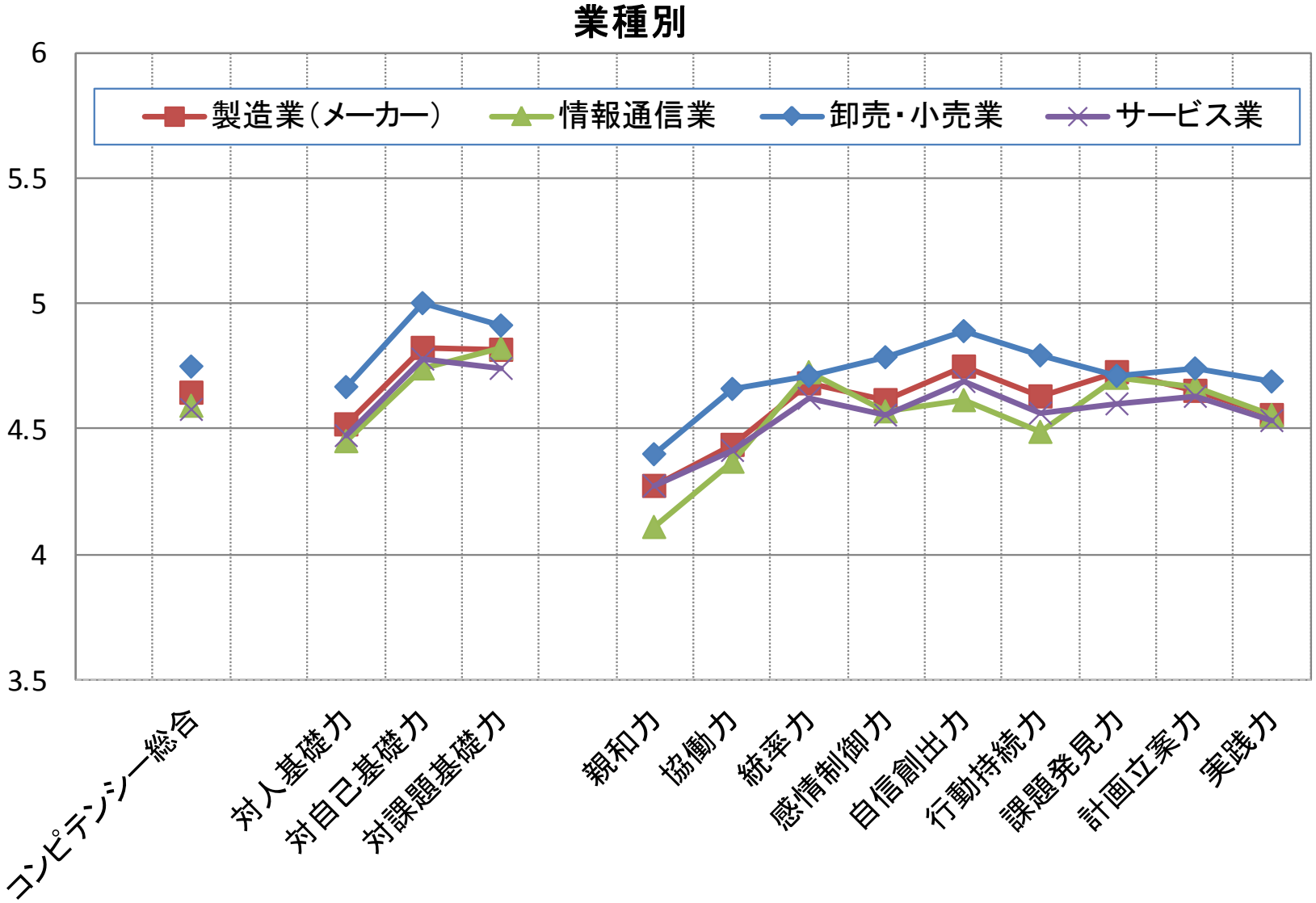
BタイプとDタイプ、はたしてどちらが就職に有利なのか？

企業規模、業種、職種などで異なる可能性も考えられる



社会人に見るPROGのスコア（１）

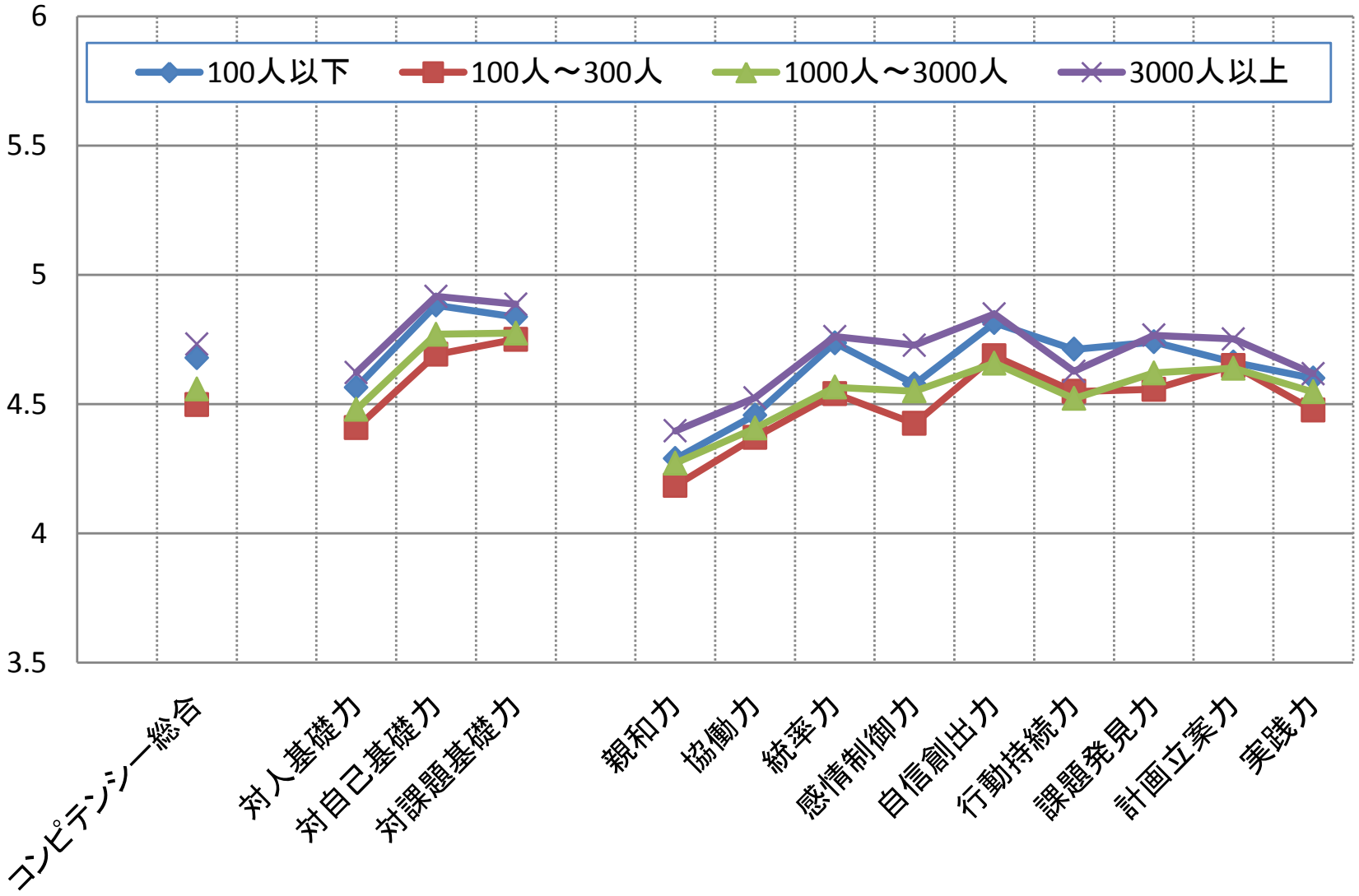
4000人の基準集団に見る傾向



社会人に見るPROGのスコア（２）

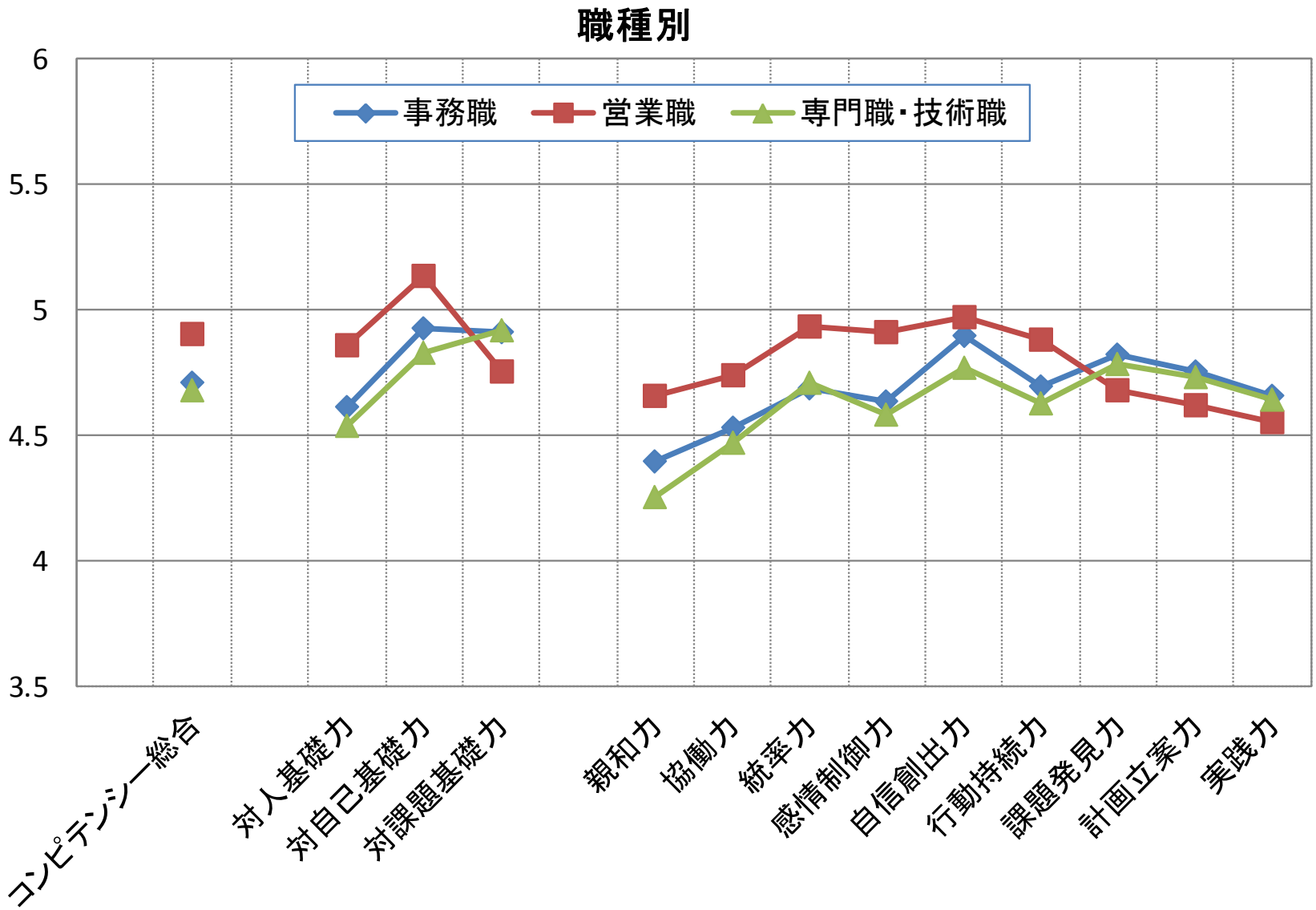
4000人の基準集団に見る傾向

従業員規模別

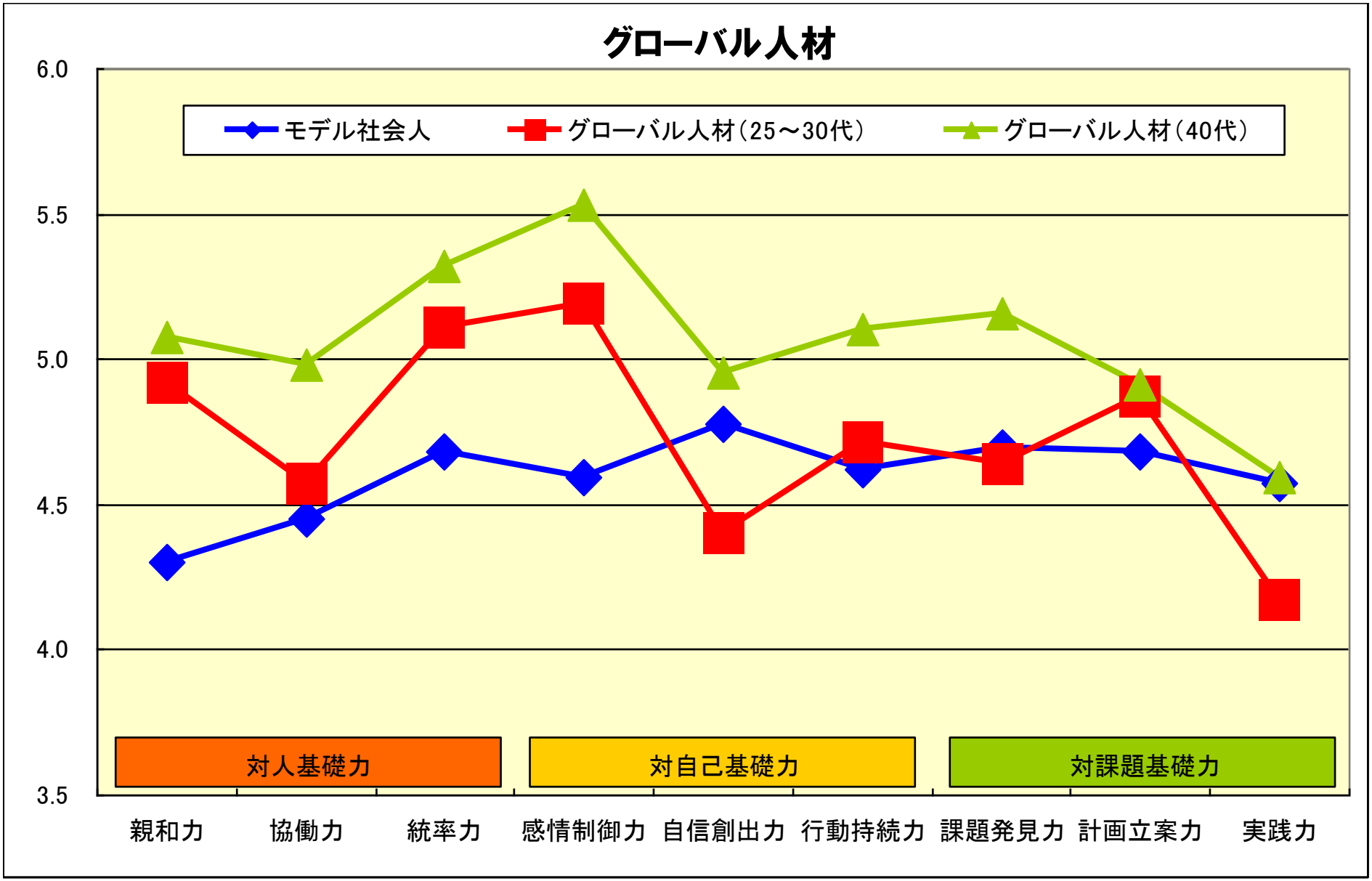


社会人に見るPROGのスコア（３）

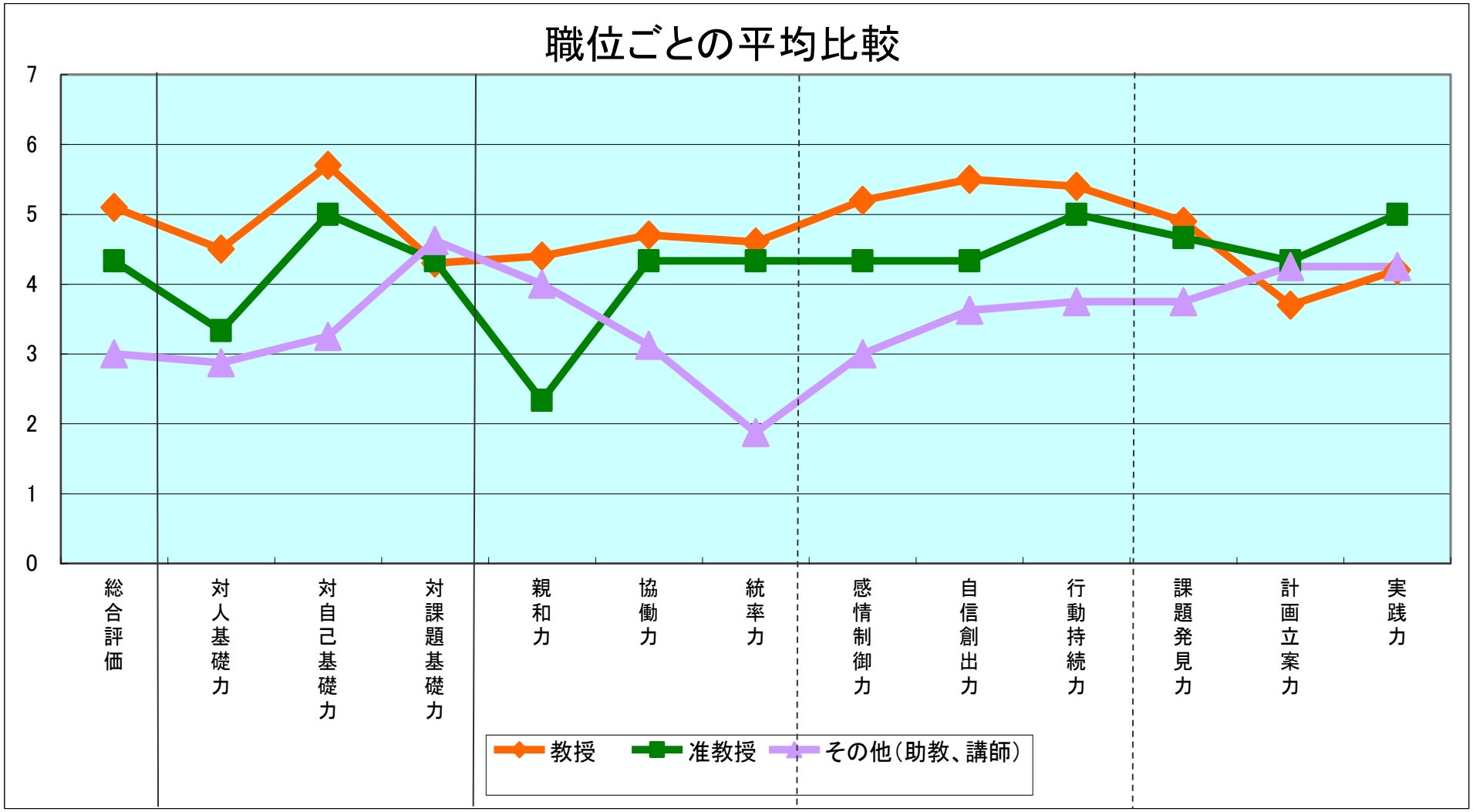
4000人の基準集団に見る傾向



社会人に見るPROGのスコア（４）



※グローバル人材：25歳～49歳の日本人ビジネスパーソン。アジアにおいて、外国人のマネジメント経験があり、かつ、その当時のマネジメントに満足している者（735人、平均駐在期間は約4年）。

社会人に見るPROGのスコア（５）

C大学における教員のコンピテンシー